

胃内視鏡検査を受ける外来患者の不安を考える

—胃生検者のアンケートより—

厚生滑川病院

碓井知恵子, 川口 京子, 川岸 晴美

池田 京子, 栃山ひろ子, 他外来スタッフ一同

はじめに

近年、人々の医療や自己の健康に対する関心が高まり、それに伴って職場や地域において健康診断の受診率が上昇してきている。当院胃腸科においても一般外来及び厚生連の日帰人間ドックやその他の集団検診後の二次精査として、内視鏡を受ける人が年々増加の傾向にある。

現在、消化器の内視鏡検査は急速な発展と普及を遂げ、全消化管の診断には不可欠の検査になっている。

ところで、内視鏡検査を勧められた場合、現在のところ多くの人が受診を逡巡する傾向にある。

そこで、私達は胃内視鏡検査を勧められた人が、検査を受け、結果が出るまでの精神的不安を知る目的で、検査を受けた人を対象に、検査前後に感じたり考えたことなどについてアンケート調査を行った。

その結果、胃内視鏡検査受診者の不安の一端を知ることができたので、以下に報告する。

調査目的

胃内視鏡検査を受けた患者の不安を知る事により、今後の外来看護における援助の糸口を導きだす。

調査方法

昭和60年10月1日から12月末日までの間に、胃内視鏡検査を実施し、病理検査を受けた25歳から70歳の全員（50人、入院を除く）に、アンケート用紙を送付し回答をもとめた。

調査結果

50名にアンケート用紙を送付し、そのうち40名から回答が寄せられた。

胃カメラの経験回数では、40人中24人（60.0%）が始めてであったが、4割はすでに何度か経験した人であった。

「胃カメラが胃透視より詳しい検査のできることを知っているか」との間では、ほとんどの人がその認識をもっていた。

胃透視を受けた後、胃カメラを勧められて検査を受けるまでの胃カメラに対する印象では、「簡単にのめるだろうか」との不安が最も多く、次いで「息苦しいのではないだろうか」、「痛いのではないか」の順であった。

このように胃カメラに対して不安を抱いた理由は、「周りから聞いて」が最も多かった。

上記のように不安を抱く人もいるが、逆に、特に不安を感じなかった人では、不安に思わなかった理由として、「病気の方が心配だったから」と答えた人が多かった。

胃カメラを受けるまでの不安では、「悪いもの」ではないかと思ったものが半数以上あり、次いで「入院や手術」に対する不安を上げている。

では、胃カメラを勧められてから実際に検査を受けるまでの期間はどの程度であろうか。6割の人が1週間以内であったが、1ヶ月以上の人もあり意外に検査までの期間の長い人が多かった。その理由としては、「病気が心配」のため検査までの期間を長引かせているケースが多かった。

次に、実際に検査を受けに病院に来てからの問題や不安についてみると、病院に来てから検査を受けるまでの待ち時間は、7割が1時間以内であったが、残り3割は1時間以上に及んでいる。

検査開始前、検査の説明を充分受けたかと

表1 胃カメラを受けた経験回数

回数	人数
初回	24名
1回	4
2回	6
3回以上	6

表2 「胃透視より、胃カメラが詳しい検査であることを」を知っていますか

内訳	人数
はい	36
いいえ	1
わからない	3

表3 胃カメラに対する不安（※：複数回答あり）
以下同様

内訳	人数
簡単に飲めるだろうか	21
息苦しいのではないか	13
痛いのではないか	12
楽に飲めると思った	1

の間に対して、「充分だった」と答えた者が8割であったが、半面2割の者は充分でなかったとしており、同じ説明でも理解度に個人差があり、その人その人に合った説明をする必要を痛感させられた。

検査中の不安、苦痛では、「喉に麻酔が効いているか」と心配した者が8割以上いた。

検査終了時の気持ちとして、ようやく「検査が終わってほっとした」者が6割いる一方、もう二度とカメラをのみたくないと思った者も4割おり、今後このような受診者の人への対処について充分検討する必要を感じた。

その後、検査の結果について医師からの説明に対して、理解できたかの質問に対して、8割近くが「はい」と答えていたが、2割以上の者は「よくわからなかった」としている。

最後に、最終診断（病理検査）の結果までの気持ちでは、「医師に説明を聞いていたので特に気にならなかった」が半数をしめていた。

表4 胃カメラを心配した理由

内訳	人数
周りから聞いて	26
以前検査を受けて苦しかった	13
なんとなく	4

表5 胃カメラを心配しなかった理由（※）

内訳	人数
検査の意味がわからなかった	1
以前受けて、つらいと思わなかった	2
病気の方が心配だった	12

表6 胃カメラを受けるまでの期間

内訳	人数
1週間以内	24
1週間～1ヶ月	6
1ヶ月以上	10

表7 胃カメラを受けるまでの気持(※)

内 訳	人 数
癌など悪いものでないか心配だった	22
入院、手術の可能性を考えた	12
余り心配しなかった	4
友人・知人から話を聞いた	4

表8 外来での待時間

内 訳	人 数
30 分 以 内	10
1 時 間 以 内	18
1 時 間 以 上	12

表9 胃カメラの説明は、十分受けましたか

内 訳	人 数
は い	32
い い え	8

表10 検査中の不安(前処理を含む) (※)

内 訳	人 数
のどに麻酔が効いているか	33
はきけがあつて苦しかった	11
説明書等見せてもらえばよかった	5
そ の 他	3

考 察

「胃カメラは、苦しい検査」と患者間に伝えられており、必要以上に不安と恐怖を抱いている者が多かった。始めての者のみならず、経験のある人でも、「今回は、簡単にのめるだろうか」と不安を抱いており、かつ、その不安が検査を勧められてから検査を受けるまで影響しており、受診までの期間が1ヶ月間以上の人が $\frac{1}{4}$ もいた。

どれだけ検査の必要性を解いても、受けるのは本人であり、「胃カメラは苦しいものだ

表11 検査終了直後の気持 (※)

内 訳	人 数
検査が終つて安心した	24
もう二度と飲みたくない	16
思ったより楽だった	7
そ の 他	1

表12 検査後の医師からの説明は十分理解できたか

内 訳	人 数
は い	31
い い え	7
そ の 他	2

表13 最終診断(病理結果)がわかるまで(※)

内 訳	人 数
○医師からカメラの説明を聞いていたので、気にならなかった	21
○悪い病気でないか心配だった	9
○結果を心配しながら毎日を送った	6
○悪い病気だったらと思ひ職場・家族の事を考えていた	4
○そ の 他	3

との先入観を取り除くとともに、胃カメラの必要性について、日常的に健康教室、集団検診、外来診療時等あらゆる場面での啓蒙活動の重要性を痛感した。

待ち時間についても、2時間以上も待たされた人が3割もあり、外来での待ち時間が長いことが、よけいに心配をつのらせることになり、短くするように心がけなければならない。

現在、予約時間制を取り入れており、少しづつ改善されつつあるが、今後とも医師や看護婦、さらに他の職員の協力で対処すべき問題である。

検査中については、麻酔が効くか心配している。咽頭麻酔については、充分考慮されているにもかかわらず、検査終了後「もう二度と飲みたくない」と答えた人が4割もあり、胃内視鏡検査前の処置、またその手技についても充分検討する必要があると考えられる。

最終診断である病理結果については、医師より心配ないと説明を受けているにもかかわらず、約半数が病気でないか不安を持っている。

早期発見と言われている癌検診において、苦痛なく早く結果を出すことは、医療チームとして大切なことである。特に重要なのは、検査を受けるまでにかかわる人達の接し方であり、受付、検査のオリエンテーションにか

かわる人間の接し方も重要であると考えられた。

以上、胃内視鏡検査を受ける人達の不安について、アンケートにより調査を行ったが、本調査を通じ、日頃一方的になりがちな看護婦業務について反省させられる点が多々あった。

今日、癌の早期発見が強く叫ばれているが、胃透視から胃カメラの受診までが不安なく行われることにより、始めて胃癌検診等の本当の価値が発揮されると思われる。今後とも、これら受診者の不安を少しでも取り除く努力をしていきたい。

おわりに、調査にご協力をいただいた方々に深く感謝致します。